

# 幼児のはじめての集団経験



南 信 子

## (一)はじめての経験

幼児は生後その成長とともに、毎日さまざまな経験をつみかさねていくのであるが、それらはみな彼らにとってはじめての経験である。立つことも、歩くことも、ことばを話すこともすべて成長という不思議な営みのなかで自ら経験していくのである。ことばをかわすことによって快い人間関係が生まれることを経験し、やがて自分自身の力を用いて生きていく一つの要領も、こうした経験によって会得していくのである。これらはごくその一例にすぎないが、幼児にとってはすべての営みがはじめての経験であるといつても過言ではない。そしてその経験がいつ、いかにして与えられるかということは、幼児の成長発達とその人間形成に大きな役割をもっているのである。時と方法が適切であれば、その経験はその子どもの欲求を満足させ、成長発達を促すよい機会となる。また最初の経験はあとにつづく経験にも影響を及ぼすこ

とが多く極めて重要な意義をもっている。特に幼稚園入園ということは幼児にとって社会生活の第一歩であるともいわれ、彼らの人生における画期的なはじめての集団生活の経験であるといえよう。しかし一面三才を過ぎた幼児が幼稚園に入園することは極めて自然な発達に即した、しかも幼児に必要な経験であると考えることができるのである。その理由について二、三考えてみたい。

## (二)家庭から幼稚園へ

### A 独立のはじめ

幼児は満三才をすぎる頃から、簡単な身のまわりのことを一通り独立してすることができるようになり、ひとりですることに満足をもつようになるのが普通である。従って情緒もやや安定し、一日のうちいちばんの時間を両親や親しい家族とはなれて過ごすことができるようになって成長発達する。もちろんそのためには母と子

の間に親密な信頼関係がなければならぬし、その子ども自身がその知能も身体も、情緒や社会性もその年齢相応に成熟していることが必要である。そうした条件がととのつていれば、三才児でも午前中三、四時間の保育を受けるために幼稚園に通うことは極めて自然なことであり、このことは子ども自身に家庭生活以外のようこびを与えるよい経験となり、また子ども自身が自分で独立して何かできるという成功感をもつてよい機会となる。もちろん独立しているといつても、まだまだ大人に依存し、大人の助けをえなければ生活を支えることができないので、彼らをうけいれる幼稚園の教師は母親にかわって子どもたちのために行き届いた世話をし、彼らの信頼に応えうる人物であることが望ましいことは申すまでもない。

### B 社会性の発達

更に三、四才児は友だちを求める年齢であり、家庭において大人だけを相手にしたり、遊びの対象が兄姉、弟妹であるよりも、同じ年齢の友だちが与えられることは子ども自身にとって楽しい経験であるとともに、そこにくりひろげられる集団経験は子どもの人格形成に大きな役割を果たすのである。勿論三才や四才の子ども同士では問題を解決する力もなく、子どもにとつて不快なことがおこればすぐに母を求めて泣いたり、友だちとけんかをして教師を困らせるような事態になることもしばしばであるが、ともあれ三才四才の子どもには友だちが必要であり、彼らは友だちと

遊ぶ経験をしながら他の人と交わる方法や態度を自然に学んでいくのである。

### C 好奇心

また三才をすぎた子どもはあらゆる方面の好奇心が強く、家庭以外の広い経験を積極的に求めるようになり、家から出ようとし、街にいったり、野に出たりすることを喜び、公園の遊具に執着を示し、人の話をきいたり、大人の動作に強い反応を現わすようになる。こうした幼児的好奇心はもはや家庭だけでは満たされなくなるので、午前中の三、四時間で幼稚園で過ごすことは最適の好条件である。また好奇心は知能の啓発にも役立ち積極的に行動する原動力ともなるのである。幼稚園で友だちと遊ぶことによって遊ぶ内容も豊富になり、歌を歌ったり、お話をきいたりするなど、彼らが興味をもつて参加する幼稚園のプログラムを通して経験はどんどん拡大し、言葉も知識も豊富になり、態度も向上しあらゆる方面にめざましい発達をとげるに至るのである。

以上に述べたように幼児の身のまわりの独立、情緒の安定、社会性、知的発達などの観点から考えても幼稚園入園という幼児にとってはじめての集団経験は彼らの人生にとって画期的なものであるとともに一面極めて自然な幼児の発達、要求にそつた経験であることが考えられるのである。即ち彼らに必要な経験であるとともに幼児自身にとつても満足と喜びの与えられる経験であるといえよう。そこで多くの新入園児たちは幼稚園に入園する日を希

望に胸ふくらませて待ちこがれるのである。

幼稚園側はこうした子どもたちの希望と夢をきずつけることなく、幼稚園独自の教育の目標を達成するために最善の備えをして新入園児達を迎えるなければならないのである。

さてこうして多くの子どもたちは入園を待ちわび、やがて幼稚園生活をこの上なく楽しいものとして受けいれ、積極的にこれに参加していくが、しかしすべての子どもが入園当初からこのよくな状態であるということはできない。入園当初には特に多くの問題がおこることを予想しなければならない。次にそれらの問題にふれその留意点について考えてみたい。

### (三) 入園当初の諸問題

#### A 個人的条件・レディネス

入園当初の多くの問題は新入園児の集団生活に対する不適応からおこる問題であり、それは個々の幼児の集団経験へのレディネスの問題であるといえよう。前述したように三才すぎると一応身のまわりのことに独立し、情緒もやや安定してくるのが普通であるが、家庭において両親のそばをひとときも離れたことのない子どもには両親のいない幼稚園の生活は不安であり、入園に際し母親と別れる時に泣きわめいて母親の姿を追うことが多い。母親自身も子どもを幼稚園にのこしていくことに不安を感じ、その感情は子どもにも影響し、いよいよ問題を困難なものにすることが多

いのである。また不意に、あるいは約束なしに母親に置きざりにされた経験をもつ子どもは幼稚園入園に際してその記憶がよみがえり不安のとりことなる。いつのまにか逃げるようになどもをおいていく母親の子どもにも、同じような例が見られる。即ち子どもたちの過去の経験のなかに母と子の信頼関係に問題のある場合には、幼稚園入園はあまりにも激しい変化であり、情緒の安定をもたらすために問題がある。たゞ、このことは必ずしも必ずしもたゞの過度の過敏な反応をもたらすものではある。

また子どもたちは幼稚園生活の中で独立の欲求を満足させ成功感を味わうことについて前述したが、家庭で独立的な態度を身につけていない幼児にとっては幼稚園生活は期待に反し、抵抗を感じ、成功感どころか劣等感をもったり、極度の反社会的行動をうみ出すものとなる場合も往々にしてある。身のまわりのことに独立していないことは幼稚園生活を困難にすることが多いので教師はこの問題に深い洞察が必要である。

また前項(B)でのべたように就園の年齢は友だちを求める年齢であるとはいえたが、それでも仲好く遊べる時期とはいえない。お互いに自己中心的で他を省みる力をもっていない。特に家庭でいつもわがままを通してきた子どもには幼稚園は全く不自由な環境であり、ある程度の自己統制力をもっていない子どもには集団生活は極めて抵抗の多い環境である。ここに子ども同士の摩擦がたえず、これをのりこえる力をもっていない子どもは脱落したり問題行動をおこす結果となる。そこで教師は子ども同士が対人関係を

もつように指導をおこなつてはならないと思う。友情は相互にきずいていくものであるが、幼児のためには教師の助けが必要なのである。よい友だちが与えられると子どもの世界は明るくひろがつていくことをしばしば見ることができるが、子どもの世界に友だちが大きな役割をもつております時には教師以上の存在であることを見失してはならない。

また身体的欠陥をもつてゐるもの、あるいは知的、社会的遅滞児の場合には当然集団生活へのレディネスに欠けていることが多いので幼稚園入園については慎重な態度が必要であるといえよう。こうして新入園児を迎えるためには一人ひとりの集団生活へのレディネスが如何なる状態にあるかができるだけ早く的確に知ることが大切である。そして集団生活のスタートに破綻をきたさないよう最善の努力をしなければならない。また入園当初集団生活に適応していると見えても何週間か後に登園を拒否する状態があらわれたり、数週間後には手におえない問題が山積するような芽をこの入園当初のうちに芽生えさせることがあることも忘れてはならない。次に環境的条件について考えてみたい。

## B 環境的条件

### ④ 通園

幼稚園の環境が果たしてその子どもにとって適切であるかどうかは大きな問題である。最近の交通事情は幼児の通園にも大きな問題を投げかけているが、あまりに遠距離からの通園は子

どもを疲労させ幼稚園に対するすべての興味を失わせる。また常に危険をはらんでいるような地域における通園は子どもの神経をとがらせ情緒を不安定にするので、新入園児の場合特に考慮が必要である。とにかく幼児のために通園の安全が保証されていなければならないということは必須の条件である。

### ⑤ 園児数

幼児はグループで遊ぶといつても三才児ではまだひとり遊びや平行遊びが多く、四才児でも僅かの人数を友だちにするだけである。園児数が多く教師の少ない園では到底一人だけの幼児に行き届いた指導をすることができないので、ボス的な存在が乱暴にふるまい、消極的な子どもは置き去りにされるといったこともおこり、集団からもれる子どもが多くなるのでよい環境とはいえない。特に新入園児は問題が多いといわねばならない。

### ⑥ 設備

設備がよくととのっていることは新入園児が園に早くなれるために大切なことであるが、それとともに子どもを迎えるための行き届いた準備が必要である。初めての子どもにも安定感を与え、喜びを感じさせるような楽しい雰囲気のために装飾を考えることもよいが、徒然に刺激するようなものは禁物である。

子どもを活動にひきいれるような魅力のある玩具、遊具、教材は貴重な存在である。自然観察、音楽的経験、絵画製作、お話し、劇遊びなど幼児が没頭することのできる遊びへの導入のために

充分な設備をととのえることが大切である。

#### ④教育課程

幼稚園の生活は遊びを主体としてすすめられることが望ましいことは勿論であり、彼らは遊びの中で成長発達し、知らないうちに望ましい社会生活の態度や習慣を身につけていくのである。小学校の準備教育のような内容をもつたり、早教育や年齢にふさわしくない集団訓練は禁物である。人間の人格の基礎のできる幼児期の独自な教育の目標が達成されるよう豊かな経験内容を充分に与えることが肝要である。入園当初は特に幼児の過去の経験や発達に応じた内容がもりあげられることが大切である。できるだけ緊張度の高くなきものを考へることや新しいものと子ども自身がすでに慣れ親しんできたものをとりま

せ、内容にも静と動のリズムをもち集団生活の最初におこる疲労度に注意しながら幼稚園は楽しいところという印象をまず与えることが大切である。

#### ⑤教師の問題

教育の目標を達成し、幼児自身が楽しんで幼稚園生活をするためには、教師の子どもに対する深い愛情がこれらの多くの問題解決の鍵となることが多いように思う。教師はできるだけ一人ひとりの幼児を早くよく理解することが大切である。集団生活に適応できない子どものためには、その原因を早く探し、その子どものがわにたって望ましい指導を最初からしなければな

らない。又教師としての様々な技術を身につけていることが必要であるが、音楽、お話、遊びなどのプログラムをすすめる時に子どもの興味をつづけさせ、子どもの創造性を伸ばすことのできる指導技術や、子どもの小さな反応、変化にすぐ気づくような機敏さ、子どもの歩みにあわせるために待つことのできる忍耐づよさ、子どもとともに考え、子どもの心になることのできる純真さ、子どもを納得させることのできる考え方のたしかさをもつことなどは教師となるものに必要な特性といえよう。こうして子どもたちとの間に人格のふれあいが生じ、両者に満足と幸福感がみなぎっているような美しい人間関係がうちたてられることが望ましいのである。

#### ⑥家庭との連絡

幼稚園の教育方針やその内容について家庭の両親がよく理解しているということは、入園に際して欠くことのできない条件である。両親の期待することと園の教育方針が相違するところにはよい結果が生まれるはずがないからである。また保育時間や通園に関する事柄、携帯品や服装などについてよく連絡がとれていることが大切である。家庭の両親が幼稚園の教師を信頼し、子どもと楽しい幼稚園生活について常に語り、幼稚園教師は家庭と連絡を密にし、協力していくことによって幼稚園と家庭との関係は子どもを中心としてこの上なく美しいものとなるであろう。